

「社会参加」の会話分析 —習字教室における会話の開始を題材に—

坂井 愛理^{*1}

Conversation Analysis of Social Participation: Face-to-face Openings in Calligraphy Lessons

Eri SAKAI

【要旨】本稿は、会話分析の視点から、地域の趣味の活動が提供する社会参加のきっかけについて考察するものである。われわれは住民主催の習字教室の様子をビデオに撮影し、参加者がどのように他の参加者に話しかけているのかを分析した。分析の結果明らかになったことは2点ある。習字の活動では、他者に話しかけても良い局面が、活動の合間として定期的に訪れる。活動の合間が制度的に用意されていることが、個人作業をしながらおしゃべりもできるような気楽な参加の仕方を住民に提供している可能性がある。次に、参加者は、課題として配られたお手本の内容を話題として他者に話しかけていた。お手本は共通の基準であるから、質問や言及をする理由になるような知識や進度の差を作り出すことができる。これは相手について知らずとも話しかけることが可能な話題であり、学習課題の共有は、地域活動を新規の参加者に開かれた場にするための仕掛けであることが示唆される。

【キーワード】社会参加、会話分析、開始の前触れ、相互志向

1. はじめに

昨今のコミュニティ政策では、地域住民が、ボランティアや自治会活動、サークル活動などに参加すること、いわゆる社会参加にポジティブな効果が期待されている。たとえば、様々な種類の団体に参加している人ほど機能障害のリスクが少ないという知見がある (Kanamori et al. 2014)。また、地域内外で営まれるネットワークが住民の互酬性や信頼性の規範を醸成するという考えもある (Putnam 2000=2006)。身体的・精神的・社会的な健康を維持するために、住民は社会参加をすることが重要であると考えられている。

住民の社会参加を促進するものとして近年着目されているのが、地域の通いの場、ならびにそこで行われる様々なプログラムである。たとえば先行研究は、地域のコミュニティサロンで行われる健康増進プログラムに参加することが、障害の発症を予防するのに有効である可能性を示唆している (Hikichi et al. 2015)。また、公民館の定期的な利用が社会参加を促進し、住民の生活機能の維持に寄与していることも明らかにされている (Hosokawa et al. 2019)。これからの研究では、通いの場で行われる活動が、どのように人々の社会参加を促進させているのか、そのメカニズムを明らかにすることが課題となっている。

こうした先行研究において、社会参加という概念は様々な定義されてきた。それは、団体への参加の数で表されることもあれば (Kanamori et al. 2014)、コミュニティサロンへの参加の頻度を用いて表

^{*1} 東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学・応用倫理講座

現されることもある (Hikichi et al. 2015)。

他方で、私たちが実際に何らかの場や活動に赴くとき、参加の有無の背景には様々な関連する諸概念が関連している。たとえば私たちは、その場に馴染めるだろうかという不安を抱きながら活動に向かい、誰にどのように話しかけ、どのような自分を呈示するかについてしばしば思案するだろう¹。私たちは、社会に参加することを実際の生活の中で経験し、課題を得て、それに対処しようとしているのであって、地域の通いの場がどのように社会参加を促進しているかを明らかにするためには、他者と共存することが、特定の空間の中で、どのような諸概念と結びつきながら行われているのかを明らかにする必要がある。

そこで本稿は、地域のサークル活動において、他者との相互行為がどのように生まれているのかを分析する。焦点を当てるのは、参加者が他者に話しかける振る舞いである。会話の開始は、社会参加のきっかけが生まれる局面であると考えられるからである。本稿は、分析によって、社会参加を可能にする条件を地域活動の実践の場から特定することを目的とする。

2. 方法

分析のために用いるのは、エスノメソドロジー・会話分析 (以下 EMCA) の方法である。EMCA は、私たちの行為や活動がいかなる方法のもとで組織されているのかを、経験的に探究するための方法論である。この方法論のもとで、先行研究は、私たちが他者との相互行為をどのように開始しているのかについて明らかにしてきた (Schegloff 1979: 27; Mondada 2009; Pillet-Shore 2010, 2018, 2020)。ロレンザ・モンダダ (Mondada 2009) によると、私たちが相互行為を行うための条件は、空間の中で成員がお互いに志向しあっている (相互志向, *mutual orientation*) ことである。たとえば道端で誰かに話しかけようと思ったとき、私たちは身体の向きや視線を調整し、互いに注意が向き合うように相互行為の開始を準備する必要がある。そして、「開始の前触れ (*pre-beginning*)」と呼ばれるこの局面に、私たちは、これから行われる相互行為で始まる活動・アイデンティティ・カテゴリー化に対する期待を表す (Mondada 2009: 1983) のである。本稿は、こうした開始の前触れの局面が、サークル活動の場面でどのように作られることによって、話しかけることが達成されているのかについて分析を行う。

3. 調査と活動の概要

3-1. フィールドと調査の概要

調査地は、高齢社会総合研究機構が運営する千葉県柏市内のコミュニティ・スペースである。団地の商店街の一角に位置するこの場所は、貸しスペースとして住民に開放されており、地域内外の団体が毎日様々な活動を行っている。

われわれはこれらの活動のうち、団地住民が主催する習字教室で調査を行った。この教室には、コミュニティ・スペースが開設されて半年あまりが経過した 2018 年 9 月の時点で、毎回 15~20 名ほどの参加者が、一人、あるいは友人と連れ立って参加していた。毎回の参加は必須ではなく、100 円の参加費を払えば 2 時間ほどのレッスンに誰でも参加することができる、オープンな習字教室であった。

¹ 社会参加という語は、他者、さらには社会とのつながりを深化させることを想起させる概念でもある。実際 Levasseur et al. (2011) は、社会参加という概念には複数のレベルが存在すると述べている。彼らは、1) 人とのつながりを持つために (準備中の) 活動に参加する。2) 他者と共にある。3) 特定の活動なしに人と相互行為する。4) 他者と共にある活動をする。5) 他者を助ける。6) 社会に貢献する、といった 6 つのレベルを挙げながら、社会参加という語は、他者と相互行為をすることから市民参加 (*social/civic engagement*) をすることまでを内包する概念であることを示している。

われわれはこの活動場面に IC レコーダーとビデオカメラを持ち込み、主催者と参加者の同意を得て、習字教室の準備から片付けまでの様子を記録した。撮影は2018年9月に行われ、調査への協力者は10人の参加者と1人の講師からなる11人であった。撮影時間は約2時間で、参加者と4台のカメラの配置は図1の通りである。調査は、東京大学の倫理審査を経て実施された。

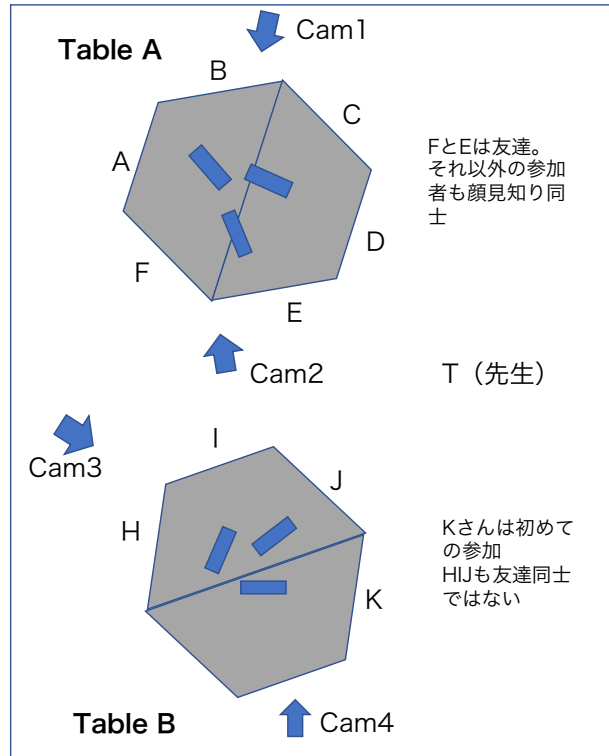


図1 参加者とカメラの配置

3-2. 対象とする活動の概要

この習字教室では、主催者である講師がいるは順を示したお手本を作成し、その字を各自が習うやり方で習字が進められていた。初回の参加者は「い」の字から習い始めるが、その後の進行速度は自由であった。講師は部屋を巡回し、必要に応じて朱書きで指導を行ったり、字のポイントを皆に伝えたりしていた。めいめいの参加者の中には、黙々と書く者もあれば、おしゃべりの合間に書き進める者もあった。

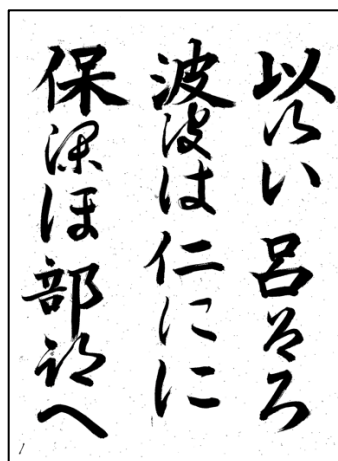


図2 参加者に配布されるお手本

本稿は、この習字教室の活動において開始の前触れの局面がいつ開かれ、その機会に、参加者たちがどのように互いの志向を向け合い、会話を開始しているのかについて考察する。

なお、トランスクリプトで用いている記号の意味は本稿の末尾に示した。

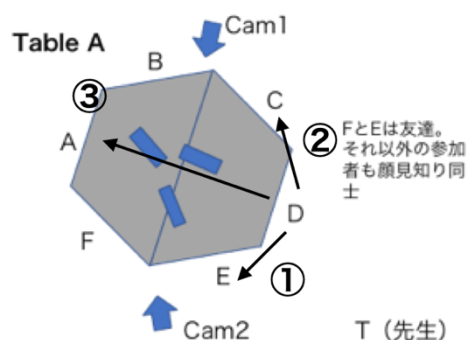
4. 分析

4-1. 習字教室における開始の前触れ

まずは、習字教室の参加者がいつ他者に話しかけているのかを分析する。以下の断片 1 では、参加者である D が、同じテーブルで書を書いている他の参加者 (A) に話しかけている。

(1) [BDMV2_2 00:30]

- 01 | (0.2)
 d: -> | 筆に墨汁をつけながら E を見る ①
 e: | 半紙に書を書き始める
- 03 | (0.2)
 d: -> | 筆に墨汁を付けながら C を見る ②
 c: | 書を書いている
- 04 | (0.2)
 d: -> | A を見る ③
- 05 D: -> | この筆の先ってあら- 洗った方がいいの?
 06 A: | [え?
 07 C: | [洗っちゃった方がいいでしょ?



Dはトランスクリプトの5行目で、筆の洗い方についてAに尋ねているが(「この筆の先ってあら、洗った方がいいの?」)、この話しかけはどのように開始されているのだろうか。この質問に至るまでのDの振る舞いを見てみると、話しかけるまでの間、Dはテーブルを見回し、他の参加者の様子を観察している。まずDは左隣のEを見るけれども、Eは半紙に文字を書き始めたところであった(1行目)。次に右隣のCを見るが、彼女も字を書いているところであった(3行目)。そうしてDは真向かいに座っているAに視線を向け(4行目)、半紙を取り替えている最中のAと視線があって、話しかけている(5行目)。このようにDは、話しかける前に、話しかけることが可能な相手を探しているのである。

ではDにとって、何が話しかけるための条件であったのだろうか。私たちがここで観察できるEやCとAとの違いは、Aが半紙を取り替えているところであって字を書く作業に従事していないことである。習字には、字を書く前後に、こうした字を書く準備をするための時間、すなわち、半紙を交換したり、筆に墨をつけたり、文鎮を置いたりする局面が繰り返し訪れる。習字の手順に埋め込まれたこうした時間のことを本稿では「活動の合間」と呼び、この合間が、他者に話しかけることができる局面として参加者に利用されていることについて考察する。

実際D自身の振る舞いを見てみると、話しかける相手を探している間、彼女は手元で筆を持ち、墨をつけ続けている。こうして彼女は自ら作業準備のための時間を引き延ばし、話しかけが達成されるまでの間、活動の合間にとどまり続けているのである。このことから、話しかける者であるDにと

って、活動の合間にあることが会話を開始するための条件、すなわち開始の前触れ (pre-beginning) であることが見て取れる。

習字教室の場面で、こうした開始の前触れは繰り返し観察された。たとえば以下の断片2においても、活動の合間を利用して参加者が他の参加者に話しかけている。

(2) [BDMV_4_1 9:46]/[Sound_1 9:19]

01 -> (3.0) ((K, Jのお手本を覗き込む))

j: 半紙をとる

02 R: いまお手本をお持ちしますね

03 K: はい

04 -> (2.6) ((K, ふたたび Jのお手本を覗き込む))

j: 文鎮を置き直し、筆をとる

05 K: -> なん | て 読 む ん | ですか?

k: | お手本の「止」 |
を指差す

06 (0.8)

07 J: ん?

08 K: -> | ° これなんて読むの°

k: | お手本の「止」を指差す

09 J: | いろはに あんと ほへとな [の

j: | お手本の1枚目を取り出す

10 K: [¥いろはに [ほ(h)へ(h)と¥

11 J: [| うんそう

j: | お手本の文字を指差す “い・ろ・は

12 K: | ああ:: はいはいはい

j: | に・ほ・へ

13 K: [へえええ] ああああ

14 J: [| と]

j: | と “

15 J: ち: り [: ぬ: る: を]

16 K: [り: ぬ: る: を]

17 K: あ ha ha [ha

18 J: [ha ha ha を わ: か

19 K: ¥な: に書いてるのかと思った¥

20 K: hi hi hi hi

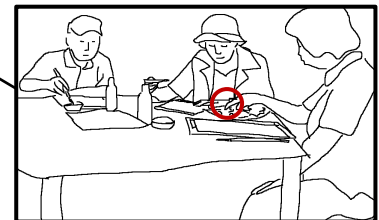
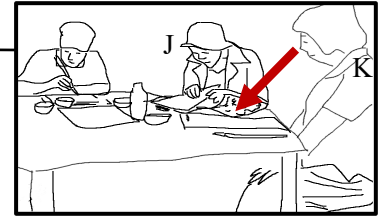
21 K: これも「い」で:: これは「ろ」::

22 J: ぜんぶ [(大きい)

23 K: [これ「ろ」ね

24 J: (いご[:ね)

25 K: [ああ なる はいはいはいはい



- 26 J: だから
 27 K: はい
 28 J: うん
 29 J: [うん [こうい[う 書 き か た]
 30 K: [あ [(。) [ああ: なるほど] 書きかたね
 31 K: [ふううん
 32 J: [ひらがなの下に[これ
 33 K: [はい
 34 T: はいこっちお手本ね:::

断片の5行目で、KがJに話しかけている。Kは、Jのお手本をの「止」（いろは順の「と」）の文字を指差しながら、その読み方を尋ねている（「なんて読むんですか？」）。8行目でもう一度同じ質問を行った（「これなんて読むの」）のちに、9行目以降、JがKにお手本の読み方について説明するやりとりが行われる（33行目まで）。

このときKは、やみくもにJに話しかけているのではない。KはJの様子を注意深く観察しながら、Jとの会話を開始できるタイミングを見計らっている。実際、KがJに関心を向け始めるのは話しかけるタイミングよりも早く、1行目である。Kは席に案内され、同じテーブルの参加者を見回したあと（トランスクリプト外）、身体を右に前傾させてJのお手本を覗き込み、自分がJに注意を向けていることを示している。KはそのままJのお手本を覗き込み続け、Jが筆をとり字を書き始める直前に話しかけている。

ここでも、活動の合間は、他者に話しかけることが可能な局面として参加者に用いられている。そして、この局面の時間的な区切り、その利用可能性が、KがJに話しかけるタイミングにとって重要になっている。Kからの話しかけが、Jの活動の合間が終了する直前で行われていることに着目したい。1行目以降KはJのお手本を覗き込んでJに注意を向けているが、注意を向けられている側は、それに気がいたら理由を問うなどの形で、相互志向に入ることを期待されるだろう。こうしてKはJを相互志向に誘い込もうとしているのであるが、それが達成されなかったために（Jから話しかけられなかったために）、Jがその志向を完全に書に向ける（つまり、相互志向に入る可能性が閉ざされる）直前に、話しかけという手段を採っているのである。Kは、Jに話しかけることが可能な最後のタイミングでKに話しかけていると言える²のであり、このことは、Kにとって、活動の合間にあることが会話を開始するための条件であることを示している。

4-2. 話しかける理由の構成

前節では、習字教室の場面において、開始の前触れのために活動の合間が利用されていることを考察した。本節では、この局面を利用して、参加者がどのように他者に話しかけているのかについて考察する。

私たちの社会において他者に話しかけるためには、話しかける/話しかけられることの条件が物理的に揃っているだけでは十分ではなく、話しかけるための理由が必要である。とりわけ、視線や体勢だ

² 先行研究において、他者に話しかける際には、先に場面に参加しているものから話しかけられる（offer）ことが、話しかけること（request）よりも優先的であるという知見がある（Pillet-Shore 2010）。ここでKは新参加者として、先行して参加しているJから相互行為に迎え入れられることを待っていたと言える。

けで相手からの注意を得られない場合には、話しかけることで他人の志向を調達する必要があるけれども、そのとき他人のテリトリーにいかにして入り込むかという課題が生まれる。習字の場面において、参加者はこの理由づけをどのように行っているのだろうか。

例えば前節で紹介した断片1のKは、振る舞いを通して、話しかける（話しかけられる）ための理由を明示している。そうした振る舞いとして、私たちは、1行目から始まる覗き込みを挙げることができるだろう。Kは話しかける前にJの方を覗き込んでKへの注意を示しているが、その際に、Jの顔を見るのではなくJのテリトリーに属するお手本を注視し、お手本の中に話しかける理由があることを明確にしている。

さらに5行目の質問において、KはJがいまから書こうとしているお手本の文字を指差して質問をしている（「なんて読むんですか？」）。Kは、Jの現在の従事する作業の部分（Jが書こうとしている文字）を利用することによって、単にJの注意を得るだけでなく、Jが志向を向けている空間に参入しようとしているのである。ここにおいて、相互志向を確立しようとすることは、単に相手の視線や注意を得ようとするのではなく、対象物への理解やその価値が共有された空間に参入しようとする事、言い換えれば他者との相互主観性を確立しようとする事でもあると言えるだろう（Pillet-Shore 2020）³。

次の断片でも、活動の合間を利用して話しかけるにあたって、話しかける者が話しかけるための理由を作っている。

(3) [BDMV2_2 2:19/BDMV_1 1:38:58]

((休憩が終わり、cはお手本を書いている))

01 | (3.4)
 b: |皆より遅れて席に座る
 02 | (0.8)
 03 c: |Dを見る
 04 (0.5)
 05 (0.5)
 c: |自分のお手本を指差す
 05 c: -> |いろはに|ほへと ち:り:ぬ:る:を:わ:か
 c: |指を折る|
 06 c: -> |を:わ:かって|これ書いてあるの?
 c: |Bのお手本を覗き込む
 c: |Bのお手本を指差す
 07 B: うんそうよ
 08 c: よた:れ:そ(ち[()
 09 B: [(そのあと[ね:)
 10 c: [う::ん

³ さらに断片1のKは、Jに質問をしたのは単にわからないことがあったからではなく、Jの活動に関心があったからであることを明確にしている。19行目でKは「何書いてるのかと思った」と、自らがJに質問をしたこと理由説明を行っているが、ここではKがお手本の読み方だけではなく、Jの活動そのものに関心を注いでいたことが示されている。この理由の説明は、Kがなぜお手本の読み方を（講師やスタッフに教えてもらうのではなく）Jに聞いたのかを明らかにするものである。

11 (1.4)

12 A: (むぎ)まで行くまで大変ね

Cは、遅れて着席したBが会話できる状態になったタイミングを見計らって、Bに話しかけている(6行目)。CはBのお手本(“わ・か・よ・た・れ・そ”が書いてある)を覗き込みながら、その読み方を尋ねている(「を・わ・かってこれ書いてあるの?」)。ここでCがBに話しかける理由として用いられているのは、Bのお手本の読み方である。

お手本は皆に配られた課題であるから、そこに参加する者なら誰もが取り上げることのできる話題である。しかしながら、その話題をいま、特定の他者に向けたためには、進行中の作業と関連させて理由づけることが必要である。ではCは、お手本の読み方を、いまBに話しかけるための理由としてどのように構成しているのだろうか。

ここでは、お手本に記載された字の並びが持つ順序が、BとCの間に関連性を持たせるとともに、彼女たちの進度の差を明確にするために利用されている。読み方を尋ねる質問の順番が、5行目のCの独り言から始まっていることに着目したい。Cは自分のお手本(“と・ち・り・ぬ・る・を”の文字が書いてある)を指でさし、指を折って数えながら、いろは順を「い」から諳んじている。このとき、Cのお手本に書いてある文字は「と」以降であるから、Cは自らの手元にある文字を読み上げているのではない。Cは「い」から想起してみせることによって、自分が問題にしているのはむしろ、いろは順の字の並びであることを示している。そうすることで、Bのお手本を自分の次に来るものとして位置付け、Bの従事する作業を自分の作業に関連させている。さらに関連性を与える際、進度という指標を用いることで、Bを自分が(読み方すら)わからないほど先の段階にいる者として位置づけ、Bの従事する作業を自らにとって言及する価値のあるものとして明確にしているのである。

5. おわりに

本稿では、習字教室の場面で参加者が他の参加者に話しかける方法について考察してきた。最後に本節では、分析を通して明らかになったことを、地域活動のプログラムづくりとの関連において展開しておく。

まず、習字の活動には、他者に話しかけることのできる活動の合間が制度的に用意されていた。文字を書き終えるたびに、次の半紙や筆を用意する局面が定期的に訪れるからだ。これは、参加者が他者に話しかけるために利用しても良いし、しなくとも問題がないような、自由な合間である。習字がこうした合間を有する活動であることが、習字教室における特定の参加の仕方、たとえば、個人作業をしながら他者ともおしゃべりすることのできるといった気楽さを生み出している可能性がある⁴。

次に本稿で扱った事例において、皆に配られたお手本は、参加者が他の参加者に話しかけるための理由を構成していた。お手本は共通の基準であるから、それに基づいて、質問や言及をする理由になるような、知識や進度の差異を作り出すことができるのである。地域で行われるサークル活動が多様な参加者を迎え入れる場であるためには、相手についてよく知らずとも話しかけることのできるような話題があることが必要である。学習課題を参加者に配布することは、そうした話題を供給する一つの仕掛けであると言えるかもしれない。

⁴ もちろん、こうした合間があれば参加者同士の会話が始まるのに十分というわけではない。習字教室に固有な交流の仕方を構成しうる他の要素として、私たちは、参加者の属性や、場の雰囲気、座席の配置、主催者によるファシリテーションなど、様々な特徴を挙げることができる。こうした記述のそれぞれが社会参加との間に有する関連性を特定することは、今後の分析に開かれている。

本稿はこうして、社会参加をすることが、特定の空間のなかで、他者と共在するやり方として調整されていることを示してきた。本稿にとってのさらなる課題は、活動に配置された物の利用について考察をすることである。本稿で扱った事例において、学習課題は紙の上に印字され、参加者に配布されていた。学習課題を示すとき、私たちは言葉によってもそれを行うことができるが、物の上に記された学習課題は、そうした場合は異なる利用可能性を参加者に提供するだろう。習字教室特有の参加の仕方を明らかにするために、今後の研究においては、学習課題が共有される方法について考察することが必要である。

【トランスクリプトの記号について】

[複数の参加者の発する音声为重なり始めている時点とその終わり
=	2つの発話が途切れなく密着していること、あるいは1つの発話において語と語と途切れなく密着していること
(n. m)	音声途絶えている状態があるときは、その秒数が0。2秒ごとに示される
(。)	0.2秒以下の短い間合い
::	直前の音が延ばされていること
言-	言葉が不完全なまま途切れていること
h	呼気音
。h	吸気音
言(h)	笑いながら発話が産出されている
笑	発話が笑い声でなされている
<u>下線</u>	音の強さ
。。	音が小さいこと
↓↑	音調の上がり下がり
言葉_	語尾の音調があえて平坦に保たれていること
><	発話のスピードが速くなる部分
<>	発話のスピードが遅くなる部分
言葉<	急いで発言が終えられていること
#	声がかすれている部分
(())	発言の要約や、その他の注記
% &	身体の動きの開始・終了位置

【引用文献】

- Hikichi, H., N. Kondo, K. Kondo, J. Aida, T. Takeda, I. Kawachi, 2015, "Effect of a community intervention programme promoting social interactions on functional disability prevention for older adults: propensity score matching and instrumental variable analyses, JAGES Taketoyo study," *J Epidemiol Community Health*, 69(9): 905-10.
- Hosokawa, R., K. Kondo, M. Ito, Y. Miyaguni, S. Mizutani, F. Goto, Y. Abe, Y. Tsuge, Y. Handa, T. Ojima, 2019, "The Effectiveness of Japan's Community Centers in Facilitating Social Participation and Maintaining the Functional Capacity of Older People," *Res Aging*, 41(4): 315-35.
- Kanamori, S., Y. Kai, J. Aida, K. Kondo, I. Kawachi, H. Hirai, K. Suzuki, 2014, "Social participation and

- the prevention of functional disability in older Japanese: The JAGES cohort study,” *PloS One*, 9(6): e99638.
- Levasseur, M., L. Richard, L. Gauvin, E. Raymond, 2011, “Inventory of definitions of social participation formed in the aging literature: Proposed Taxonomy of Social Activities,” *Social Science and Medicine*, 71(12): 2141-9.
- Mondada, L., 2009, “Emergent focused interactions in public places: A systematic analysis of the multimodal achievement of a common interactional space,” *Journal of Pragmatics*, 41, 1977-97.
- Pillet-Shore, D., 2010, “Making way and making sense: Including newcomers in interaction,” *Social Psychology Quarterly*, 73(2): 152-75.
- , 2018, “How to begin,” *Research on Language and Social Interaction*, 51(3): 213-31.
- , 2020, “When make the sensory social: Registering in face-to-face openings,” *Symbolic Interaction*, 1-30.
- Putnam, R., 2000, *Bowling Alone: The collapse and revival of American community*, New York: Simon and Schuster. (柴内康文訳, 2006, 『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房.)
- Schegloff, E., 1979, Identification and recognition in telephone openings, G. Psathas, ed., *Everyday Language: Studies in ethnomethodology*, New York: Irvington Publishers, 23-78.

【受理日】(2021年2月1日受理)